

八幡太郎

楠山正雄

青空文庫

にほん 日本のむかしの武士で一番強かつたのは源氏の武士でございま
 す。その源氏の先祖で、一番えらい大将といえば八幡太郎
 でございます。むかし源氏の武士は戦に出る時、氏神さまの八
 幡大神のお名を唱えるといつしよに、きつと先祖の八幡太
 郎を思い出して、いつも自分の向かつて行く先々には、八幡
 太郎の霊が守つていてくれると思つて、戦に励んだものでした。
 八幡太郎は源頼義という大将の長男で、おと
 うさんの頼義が、ある晩八幡大神からりっぱな宝剣を頂

いたという夢を見ると、間もなく八幡太郎が生まれました。七つの年に石清水八幡のお宮で元服して、八幡太郎義家と名のりました。

義家は子供の時から弓がうまくって、もう十二、三という年にはたいていの武士の引けないような上手な弓を引いて、射れば必ず当たるといふ不思議なわざをもっていました。

ある時清原武則というこれも弓の名人で名高かった人が、義家のほんとうの弓勢を知りたがって、丈夫な鎧を三重ねまで木の上にかけて、義家に射させました。義家はそこらにある弓に矢をつがえて、無造作に放しますと、鎧を三枚とおして、後ろに五寸も鏃が出ていました。

大きくなつて、義家はおとうさんの頼義について、奥
 州うの安倍貞任あべのさだとう、宗任むねとうという兄きょうだい弟あいらの荒えびすを征伐せいばつに
 行きました。その戦いくさは九年ねんもつづいて、その間あいだにはずいぶんはげ
 しい大雪おおゆきに悩なやんだり、兵ひやうろう糧あやがなくなつて危あやうく餓うえ死じにを
 しかけたり、一時じは敵てきの勢いきおいがたいそう強つよくつて、味方みかたは残のこらず
う討じち死かくごにと覚悟かくごをきめたりしたこともありました。その度たびごと
 にいつも義家よしいえが、不思議ふしぎな智恵ちえと勇氣ゆうきと、それから神様かみさまのよ
ゆみやうな弓矢わぎの技てきで敵しりぞを退けて、九分九厘くぶくりんまで負まけ戦いくさにきまつたもの

を、もり返して味方の勝利にしました。

それで戦えば戦うたんに八幡太郎の名が高くなりました。さすがの荒えびすもふるえ上がって、しまいには八幡太郎の名を聞いただけで逃げ出すようになりました。

けれども、強いばかりが武士ではありません。八幡太郎が心のやさしい、神様のように情けの深い人だということは、敵すらも感じて、慕わしく思うようになりました。

それはもう長い長い九年の戦いもそろそろおしまいになるうといふ時分のことでした。ある日はげしい戦のあとで、義家は敵の大將の貞任とただ二人、一騎打ちの勝負をいたしました。そのうちとうとう貞任がかなわなくなつて、馬の首を向け

かえして、逃げて行こうとしますと、義家は後ろから大きな声
で、

「衣のたては

ほころびにけり。」

と和歌の下の句をうたいかけました。すると貞任も逃げなが
ら振り向いて、

「年を経し

糸の乱れの

苦しさに。」

とすぐに上の句をつけました。これは戦の場所がちょうど衣
川のそばの「衣の館」という所でしたから、義家が貞任に、

「お前の衣まえころもももうほころびた。お前の運まえうんももう未すえだ。」

とあざけつたのでございませう。すると貞任さだとうも負けまずに、

「それはなにしろ長年ながねんの戦いくさで、衣ころもの糸いともばらばらにほごれてきたからしかたがない。」

とよみかえしたのでした。

これで義家よしいえもいかにも貞任さだとうがかわいそうになつて、その日はそのまま見逃みのがしてかえしてやりました。

けれども一度は逃にがしてやつても、いつたい運うんの尽つきたものはどうにもならないので、間まもなく貞任さだとうは殺ころされ、弟おとうとの宗任むねとうも生いけ捕どりになつて、奥州おうしゅうの荒あらびすは残のこらず滅ほろびてしまひました。そこで頼義よりよしと義家よしいえの二人ふたりは九年ねんの苦くるしい戦いくさの後のち、生いけ

捕りの敵を引き連れて、めでたく京都へ凱旋いたしました。

三

京都へ帰つて後、敵の大將の宗任はすぐに首を切られるはずでしたけれど、義家は、

「戦がすんでしまえば、もう敵も味方もない。むだに人の命を絶つには及ばない。」

と思ひました。そこで天子さまに願つて、自分が御褒美を頂く代わりに、宗任はじめ敵のとりこを残らず許してやりました。その中で宗任はそのまま都に止まつて、義家の家来になりました。

いとこのので、そばに置いて使うことにしました。

宗任はいつたん義家に命を助けてもらったので、たいそう

ありがたいと思つて、義家の徳になつくようになったのですが、

元々人を恨む心の深い荒えびすのことですから、自分の一家を

滅ぼした義家をやはり憎らしく思う心がぬけません。それでい

つか折があつたら、殺して敵を討つてやろうとねらつておりまし

た。けれども義家の方はいっこう平気で、昔から使いなれた家

来同様宗任をかわいがつて、どこへ行くにも、「宗任、宗

任。」とお供につれて歩いていました。

するとある晩のことでした。義家はたった一人宗任をお供

につれて、ある人の家をたずねに行つて、夜おそく帰つて来まし

た。宗任は牛車を追いながら、今夜こそ義家を殺してやろうと思ひました。そこで懐からそろそろ刀を抜きかけて、そつと車の中をのぞきますと、中では義家がなんにも胸にわだかまりのない顔をして、すやすや眠っていました。宗任はその時、「敵のわたしにただ一人供をさせて、少しも疑う気色も見せない。どこまで心のひろい、りっぱな人だろう。」と感心して、抜きかけた刀を引っこめてしまいました。そしてそれからままったく義家になつて、一生そむきませんでした。

それからまたある時、義家はいつものとおり宗任を一人お供につれて、大臣の藤原頼通という人のお屋敷へよばれて

行つたことがありました。頼通よりみちは義家よしいえにくわしく奥州おうしゅうの戦争せんそうの話はなしをさせて聞きながら、おもしろいので夜の更よふけるのもわす忘れていました。ちょうどその時とき、このお屋敷やしきにその時じぶん分がくしや学者がくしやで名高なだかかつた大江匡房おおえのまさふさという人ひとが来合きあわせていて、やはり感か心しんして聞いていましたが、帰かえりがけに一言ひとこと、

「あの義家よしいえはりっぱな大将たいしょうだが、惜おしいことに戦いくさの学問がくもんができていない。」

とひとり言ごとのようによいしました。するとそれを玄関先げんかんさきで待つまていた宗任むねとうが小耳こみみにはさんで、後あとで義家よしいえに、

「匡房まさふさがこんなことをいつていました。何もなにわからない学がく者しやのくせに、生意気なまいきではありませんか。」

といつて、怒おこつていました。けれども、義家よしいえは笑わらつて、

「いや、それはあの人のいう方ほうがほんとうだ。」

といつて、そのあくる日あらかた改めてまさふさ匡房まさはらのところへ出かけて行つて、ていねいにたのんで、戦いくさの学問がくもんを教おしえてもらうことにしました。

四

するうちまた奥州おうしゅうに戦争せんそうがはじまりました。それは義よしい

家えが鎮守府ちんじゆふ将軍しようぐんになつて奥州おうしゅうに下くだつて居おりますと、

清原きよはらの真衡まねひら、家衡いえひらという荒あらかえびすの兄きょうだい弟だいの内輪うちわけんかか

らはじまつて、しまいには、家衡がおじの武衡を語らつて、
 義家よしいえに向かつて来たのでした。

そこで義家よしいえは身方の軍勢みかたぐんぜいを率ひきいて、こんども餓えと寒さむさに
 なやみながら、三年の間ねんあいだわき目もふらずに戦たたかいました。

この戦の間いくさあいだのことでした。ある日ひ義家よしいえが何気なく野原のはらを通とお
 て行きますと、草くさの深ふかく茂しげつた中から、出だし抜ぬけにばらばらとが
 んがたくさん飛とび立たちました。義家よしいえはこれを見みてしばらく考かんがえ
 ていましたが、

「野のにがんが乱みだれて立たつたところをみると、きつと伏兵ふくへいがある
 のだ。それ、こちらから先さきへかかれ。」

といいつけて、そこらの野原のはらを狩かりたてますと、案あんじょうの定じょうたくさ

んの伏兵ふくへいが草くさの中にかくれていました。そしてみんなみつかつて殺ころされてしまいました。その時とき義家よしいえは家来けらいたちに向むかつて、「がんの乱みだれて立つ時ときは伏兵ふくへいがあるしるしだということは、匡ま房さふさの卿ききようから教おそわつた兵学へいがくの本ほんにあることだ。お陰かげで危あぶないところを助たすかつた。だから学問がくもんはしなければならぬものだ。」
 といいました。

こんどの戦いくさは前まえの時ときに劣おとらず随ずい分ぶん苦くるしい戦せん争そうでしたけれど、三年ねんめにはすつかり片付かたづいてしまつて、義家よしいえはまた久ひさし振ぶりで都みやこへ帰かえることになりました。ちようど春はるのことで、奥州おうしゆうを出でて海伝うみだたいに常陸ひたちの国くにへ入はいろうとして、国境くにぎかいの勿来なこその関せきにかかりますと、みごとな山やまざくら桜ざくらがいっぱい咲さいて、風かぜも吹ふかないの

にはらはらと鎧よろいの袖そでにちりかかりました。義家よしいえはその時馬ときうまの上
 でふり返かえつて桜さくらの花はなを仰あおぎながら、

「吹ふく風かぜを

なこそその関せきと

思おもえども

道みちも狭せに散ちる

山やま桜ざくらかな。」

という歌うたを詠よみました。

これは「風かぜが中なへ吹ふきこんで来きてはいけないぞといつて立たてた
 関せき所しよであるはずなのに、どうしてこんなに通とおり道みちもふさがるほ
 ど、山やま桜ざくらの花はながたくさん散ちりかかるのであろう。」といつて、

桜の散るのを惜しんだのです。

五

八幡太郎の名はその後ますます高くなつて、しまいには鳥けだものまでその名を聞いて恐れたといわれるほどになりました。

ある時、天子さまの御所に毎晩不思議な魔物が現れて、その現れる時刻になると、天子さまは急にお熱が出て、おこりというはげしい病をお病みにになりました。そこで、八幡太郎においつけになつて、御所の警固をさせることになりました。義家は仰せをうけると、すぐ鎧直垂に身を固めて、弓矢をもつて御所

のお庭にわのまん中に立たつて見張みはりをしていました。真夜中まよなかすぎになつて、いつものとおり天子さまがおこりをお病やみになる刻限こくげんになりました。義家よしいえはまっくらなお庭にわの上につつ立たつて、魔物まものの来くると思おもわれる方角ほうかくをきつとにらみつけながら、弓ゆみづる絃ををぴん、ぴん、ぴんと三度どまで鳴なりました。そして、

「八幡太郎はちまんたろう義家よしいえ。」

と大きな声こえで名なのりました。するとそれなりすつと魔物まものは消きえて、天子てんしさまの御病氣ごびようきはきれいになおつてしまいました。

またある時とき野原のほらへ狩かりに出かけますと、向むこうからきつねが一匹びき出て来きました。義家よしいえはそれを見みて、あんな小ちいさなけものに矢やをあてるのもむごたらしい、おどしてやろうと思おもつて、弓ゆみに矢やをつ

がえて、わぎときつねの目の前の地びたに向けて放しますと、矢は絃をはなれて、やがてきつねのまん前にひよいと立ちました。

するときつねはそれだけでもう目をまわして、くるりとひっくりかえると思つと、そのまま倒れて死んでしまいました。

またある時義家が時の大臣の御堂殿のお屋敷へよばれて行きますと、ちようどそこには解脱寺の観修というえらい坊さんや、安倍晴明という名高い陰陽師や、忠明という名人の医者^{いじん}が来合^{あひあ}わせていました。その時ちようど奈良から初^{はつ}もの^{いじん}の^{いしや}う^{きあ}りを^{けんじよう}献^{けんじよう}上^きして^{めずら}来^きました。珍^{めずら}しい^{きやく}大^だき^なな^うり^だか^らとい^うので、そのま^まお^{ぼん}盆^{ぼん}に^{にん}の^{きやく}せ^てて^ま四^だ人^だの^まえ^ま客^まの^ま前^まに^ま出^だし^ました。す^{あべ}ると^のま^せず^い安^{めい}倍^{めい}晴^{めい}明^{めい}が^あそ^のう^りを^あ手^のに^のせ^て、

「ほう、これは珍しいうりだ。」

「ほう、これは珍しいうりだ。」
 といつて、眺めていました。そして、

「しかしどうも、この中には悪いものが入っているようです。」

「いいました。すると御堂殿は解脱寺の坊さんに向かつて、

「ではお上人、一つ加持をしてみてください。」

「いいました。坊さんが承知して珠数をつまぐりながら、何

か祈りはじめますと、不思議にもうりがむくむくと動き出しまし

た。さてこそ怪しいうりだというので、お医者のお忠明が針

療治に使う針を出して、

「どれ、わたしが止めてやりましょう。」

「いいながら、うりの胴中に一一所まで針を打ちますと、

なるほどそのままうりは動かなくなつてしまいました。そこで一ばんおしまいに義家が、短刀をぬいて、

「ではわたしが割つて見ましよう。」

といいながらうりを割りますと、中には案の定小蛇が一匹入つていました。見ると忠明のうった針が、ちやんと両方の目にささつていました。

そして義家がつい無造作に切り込んだ短刀は、りつぱに蛇の首と胴を切り離していました。

御堂殿は感心して、

「なるほどその道に名高い名人たちのすることは、さすがに違つたものだ。」

といたしました。

六

八幡太郎は七十近くまで長生きをして、六、七代の天子さまにお仕え申し上げました。ですからその一代の間には、りっぱな武勇の話は数しれずあつて、それがみんな後の武士たちのお手本になつたのでした。

青空文庫情報

底本：「日本の英雄伝説」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年6月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

八幡太郎

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>